



その11

# 行基

—ぎょうき—

(平成23年12月1日号—第275号)



行基は奈良時代の僧で、当時禁じられていた民衆への伝道を各地で行ったほか、開墾、かんがい、架橋といった社会事業にも数多く取り組んだため、その足跡は畿内及び周辺に数多く伝わります。

天智7年(668)、行基は堺市にある家原寺の地で渡来系の家に生まれたといわれます。出家後は、唐で玄奘【げんじょう】の教えを受けた道昭【どうしょう】に師事し、伝道や社会事業の活動に触れました。

行基が畿内各地に創建した寺院は、行基四十九院と呼ばれ、そのうち三院が枚方市内にあったとされますが、現在でもその名が残るのは、神亀2年(725)創建の久修園院【くしゅうおんいん】(楠葉中之芝)のみです。残る二院は、茨田【まんだ】郡伊香【いかが】(現在の伊加賀地域)の救(枚)方院と薦田【こもだ】尼院ですが、詳しい場所などはわかっていません。

久修園院の創建と同時期、行基は橋本(八幡市)と対岸の山崎(大山崎町)を結ぶ山崎橋を淀川に架けました。橋本の地名はこの橋のたもとに由来するものです。

また、役務に徴用された地方の農民たちに旅宿や食糧を与える施設として、畿内の9カ所に布施屋を設置しましたが、その一つが楠葉に設けられました。具体的な場所は明らかではありませんが、嘉禎4年(1238)の交野天神社棟札からは、楠葉地域のうちに布施辻という地名があったことがわかります。



久修園院(楠葉中之芝2丁目)

僧侶を国家の統制下に置こうとしていた朝廷は、こうした行基の自由な活動を当初は弾圧していましたが、民衆の絶大な支持を集めていたことから方針を改めます。そして東大寺の大仏造立に当たって寄附を集める勸進職として協力させ、その功績から大僧正の位を贈りました。しかし、天平21年(749)、行基は大仏の開眼【かいげん】を待たずして、奈良・菅原寺で入滅しました。